

訳者まえがき

ひと昔前に比べて、特に理科系の専門書や教科書の翻訳の意義は多少薄れてきたように思います。分野による違いはあるにせよ、先人の努力により現在の日本の学問レベルは、先端かあるいはそこに近いところにあります。このため、日本国内の知をまとめれば、専門書として十分であろうというのが1つの理由です。それにもかかわらず、本書の翻訳を行ったのにはいくつかの理由があります。まず1つは、原著の完成度と網羅する範囲の広さです。水文学は裾野の広い分野ですから1人の研究者がすべてを網羅するのはなかなか難しい。この理由もあり、水文学の多くの専門書が共著となっています。共著にはメリットもありますが、特に編集がきちんとしていない場合には統一性に欠けるというデメリットが生じます。その点、本書の内容は1名の著者が統一した基準、方法に従って著しており、専門書として高い完成度を有しています。それぞれの章も、論文や文献をまとめただけでなく、一部を除くと Brutsaert 教授が自身で行った研究内容を反映しており、高い説得力をもっています。また、教授の授業を受けた者なら誰でも同意してくれると思いますが、教授の講義の明確な論理の流れ、対象を俯瞰的に見られる題材の提示方法が本書にも活かされています。さらに600ページを超える原著のページ数からもわかるように、扱う内容の広さだけでなく、内容が深くかつ細部にわたっているという点もあげることができます。出版業界や執筆者側の事情などから、国内出版の教科書や専門書は200ページ程度が多いように見えます。さらにもう1つの理由として、内輸の事情にはなりますが、最近の国内の大学院の変化をあげることができます。これまで多くの大学院での授業は比較的緩やかな内容が多く、講義の形でみっちり院生に勉強してもらうというスタンスは少なかったのが実情かと思います。これが最近大学院に来る学生の質の変化、バックグラウンドや修了後の進路の多様化に伴い、講義をしっかりとやる方向に動いています。この結果、大学院生向けの教科書や専門書の必要性が生じたことがあげられます。加えて、増加している留学生の存在があります。教科書を指定するときに、日本語の教科書を選択すると、留学生にはあまり役に立ちません。このような場合に、同一内容の教科書の英語版と日本語版が存在することは大変助かります。さらに本書の場合、中国語版の出版が予定されており、これで中国からの留学生も含めて言語の障壁を低くして授業を受けてもらうことができます。もちろん本書は大学院生だけを対象としているわけではありません。関連する分野の研究者や技術者にとってもすぐに役立つレベルの解説がなされており、いろいろな場面で役に立つはずで

翻訳の方針、約束ごとを以下にまとめました。日本語版の利用にあたって参考になれば幸いです。

専門用語について

対応する日本語の専門用語がすでに存在する場合には、おおむねそれを使用した。その確認には辞書と用語集に加え、関連分野の専門書や教科書を利用したが、後者については時間との関係から網羅的とはいかなかった。1つの英語の専門用語に対して、異なる複数の日本語の用語が用いられている時には、翻訳者の判断により1つの用語を選択して採用した。しかし、章の内容により異な

る用語をあてることが適切な場合はこの限りではない。英語に対応する日本語の用語が見つからない場合には、関連研究者への聞き取り、ネットワーク上での検索により用語を選択した。ネットワーク上の検索は、発表論文の題目や抄録、大学教員の講義資料、シラバス、研究所の成果報告書などを主な対象とした。また日本語の用語が見つからない場合は、中国の大学関係の利用例を検索した。全体として、英語をそのままカタカナにして用いることは極力避けた。

人名表記について

論文を引用する場合はアルファベットのままとし、すでに定着した表記がある人の名前をあげる場合は、カタカナまたは漢字（中国系の人の場合）を用いた。複数の表記が国内で用いられている場合、あるいは定まった表記が存在しない場合には、アメリカ合衆国での比較的一般的と考えられる発音を表すカタカナ表記とした。

地名表記

国、州レベルまではカタカナまたは漢字（中国系の地名の場合）表記を採用し、それより下のレベルの地名はアルファベット表記をそのまま残した。例外は14章で、一般的に知られている歴史的な地名を中心に、カタカナ表記を採用した。

英語から日本語への翻訳

原著初版を用い、2007年8月版の正誤表の内容を反映させた。文単位での正確な逐次訳というよりは、段落単位で原文が伝えようとしている内容が日本語として伝わるように努めた。

翻訳作業

日本語版の翻訳は杉田が行い、筑波大学水文科学研究所の同僚（浅沼順、辻村真貴、山中勤、岩田拓記の各氏）に監訳をお願いした。また千葉商科大学の杉田文氏には全章に目を通してもらいコメントをいただいた。ここに記し感謝する。なお、翻訳に関しての最終的な責任は当然ながら訳者にある。

補助教材ファイル

翻訳の際に作成した主な専門用語の対訳表を web サイト (<http://www.geoenv.tsukuba.ac.jp/~sugita/Hydrology>) で提供している。また、本書を講義の教科書や参考書として利用する場合には担当教員向けに各章末の問題の解答例（英語版）が原著出版社の Cambridge University Press から提供されている。あわせて利用されたい。

最後に、本書の翻訳出版に関しまして、販売価格を原著と同程度にしたいという無理なお願いに専門家の立場から取り組んでくださり、これを可能とくださった共立出版の信沢さんに感謝いたします。また、翻訳にあたり英語の微妙なニュアンス、文の裏側にある歴史的な経緯、私の専門外の内容などについて Brutsaert 教授の筑波大学滞在中に毎日のように教えを請いました。これは私が20歳代後半に教授の下でポスドクとしてご一緒させていただいて以来続いている習慣といったところで、1の質問に対して5~10の内容を丁寧に教えていただきました。このおかげで、本書の翻訳にあたり私自身も十分に勉強となり、また楽しむことができました。これは翻訳者の特権と考えておくことにしています。なお今回の Brutsaert 教授の日本滞在は、日本学術振興会の外国人著名研究者招へい事業によるものです。

2008年4月

新入生を待つ筑波大学キャンパスにて 杉田 倫明